大雪山国立公園連絡協議会登山道維持管理部会（第 11 回）
表大雪地域/東大雪地域合同会議　議事概要

日　時：令和８年６月 12 日（金）10:00～12:00
場　所：上川町役場大会議室（オンライン併用）
出席者：出席者名参照(以下、欠席者)
・道央地区勤労者山岳連盟　副理事長兼自然保護委員長　伊吹省道
・福山市立大学都市経営学部都市経営学科　教授　澤田結基

1. 開会

●事務局 大雪山国立公園管理事務所長 岡島より挨拶

2. 議事

(1)　審議事項

1)　登山道等の協働型管理の進め方について

●事務局 友野・高橋より資料１の説明

・NPO 法人かむい 濱田 代表理事
　情報発信について、先日朝陽山でクマが出たとの情報が環境省や上川町から発信された。この件は、一般登山者がクマに会ってブラフチャージを受けたと YAMAP に書き込んだものを、当社から環境省に提供した情報である。投稿者本人への確認をせずに発信された情報のように思えるが、個人の情報のみを根拠に確認せず発信するのは適切ではないと考える。本当にブラフチャージがあったかどうか確認できるのか。
→事務局 友野
　この件は、朝陽山の登山道で 5 月以降にシカの死体があるという投稿、さらに 6 月 3 日にブラフチャージを受けたという投稿が YAMAP に上がった事案である。複数の投稿から、登山を控えた方が良い状況ではないかと判断し、その旨の周知を協議会のホームページ・SNS での発信や現地への掲示を通して行っている状況。おっしゃるとおり、現場の確認や目撃者へのヒアリングを通して情報収集した関係者はおらず、YAMAP 上の投稿のみが情報源であり根拠が薄弱である。そういった中で、個人の発信した情報のみを頼りにしている形にはならないよう、YAMAP の朝陽山全体の WEB ページのリンクを掲載するといった配慮もしている。後ほど説明を予定している資料４のとおり、ヒグマ情報の一元的な情報収集・提供を予定している。その中で、例えば可能な際は情報発信者本人への聞き取りを行うなど、より正確な情報収集と発信ができる体制を検討したい。
→NPO 法人かむい 濱田 代表理事
　6 月 3 日の件については、投稿者が個人的な知り合いで、情報は大げさではないと思う。一方で、今年は山の関係でクマについて騒がれることが予想されるため、一般の情報を鵜呑みにすると危険な状況にもなりうると危惧している。
→事務局 友野
　その点はこちらも注意すべきと認識している。今回は週末に入る前に取り急ぎ情報発信をした側面も

あった。

・山岳レクリエーション管理研究会 山口 事務局長
資料１－２で説明のあった内容について、資料１－１は今までの議論の内容が詰め込まれていて情報量が多く混沌としている印象を受けるが、まずは３路線についてPDCAサイクルを回していくという考え方で、進めていくことで良い見本ができるだろうと期待している。
情報発信について、登山道部会ではシーズン中の登山道のことを主に扱っているが、昨今は残雪期の事情や冬の遭難もあり、今後は冬山登山に関する情報の扱いをどうしていくか、考えを教えてほしい。
→事務局 高橋
大連協の一元的情報発信は夏場の登山道等の情報発信と最初に位置付けられており、冬山情報の発信は今まで行っていない。昨今、バックカントリーなど色々な情報があるが、それらについてはまだ特に何も決まっていないため、北海道からの情報やイベント関係の情報発信に限られている。
→山岳レクリエーション管理研究会 山口 事務局長
基本的には夏山も冬山も自己責任で、ある程度の情報発信はしなければならないがそれ以上は自分で情報収集すべきであり、まして冬山にはそこまで労力をかけなくてもよいと思っているが、いろいろな悲劇が起こっているのでそれを皆がどう考えるかと思ったところ。
→合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎 代表社員
冬山について自己責任ではあるが、観光地として認知されていて客を呼び込んでいる状態があるのであれば、それなりの安全管理の情報発信は必須だと思っている。今までやっていないから発信をしていないという部分が大きいと思うが、少しの情報発信で救われた命も結構あるのではないかと思う。冬も夏と同じようにというわけではないが、基本的な安全管理の情報は伝わるようにすべきだと思う。
→山岳レクリエーション管理研究会 山口 事務局長
現場を回っている方から見れば色々とあるだろう。これから先はそのような意見も含め議論していくとよいと思う。
→コーディネーター／北海道大学 渡邉 名誉教授
最低限の議論は必要と思う。夏と冬の境目がよく分からず、特にインバウンドの人は大丈夫だろうと思って情報なしで登山して、行くと実は雪がすごくて天候が悪化すると亡くなってしまうというようなことが起きている。情報に自己責任であることを書けばそれでよいということではないと思うが、どこまで書くかなどは、この部会か協議会のほうかは分からないが、トムソン先生等にも情報を出していただきながら議論していくのがよいと思う。
→Asahidake Trail Keeper 藤 代表
夏山シーズンは割と管理されている場所について、例えば旭岳の残雪の池では６月頭頃までスキーやスノーボードをする人がいるが、そういった場所では夏山シーズンの管理をいつから始めるのかといった境目がはっきりすると管理しやすいのではと思った。

・Asahidake Trail Keeper 藤 代表
資料１－２について、「将来的な評価検証体制を担う専門家」にはどのような専門家を想定しているか。
→事務局 友野
顔ぶれなど具体的には未定だが、第三者的な立場で今の体制の取組を外側から評価できる者をまず想定しており、それに加えてある程度大雪山のことも把握している者など、数名の選定が必要ではないかと考えている。

→Asahidake Trail Keeper 藤 代表
それは例えば施工や植物など、どういう分野の専門家か。
→事務局 友野
仰る通りの分野があるが、より大きくは山岳域の環境・景観保全といった観点もあり、何の専門家をどのように組み合わせるかはまだ具体的ではなく、今のところは検討中。

・北海道大学大学院農学研究院 愛甲 教授
資料１－２で、登山道ビジョンについては主要関係者で集中的な議論を予定とあるが、どういうものを作る想定か。基本的なフローとしては大雪山ビジョンと登山道ビジョンがあって路線単位の計画があるとなっており、今年は路線単位の計画案を策定済みのところについて評価検証をするということだが、登山道ビジョンの進め方がイメージできなかったので質問した。
→事務局 友野
登山道ビジョンないし全体計画がどのようなものとなり、またどのように進めていくかという部分からの検討が必要な状態と捉えている。おっしゃるとおり、こういった計画の検討は上位のものから進めいくほうが基本かとは思うが、実際に検討していく中では個別の課題や計画のほうが先に着手しやすく、いくつかの区間の計画を詰める中で登山道ビジョンの形が見えてきて、大雪山ビジョンにどうつながるかも見えてくる、最終的には公園計画等にも反映させていくといった下から上へというような流れの進め方もあるのではないかと考えている。その両方の流れをどう組み合わせるかなどは未だよく見えていないが、登山道ビジョンについてはどういったものが必要か、昨年行った意見照会の結果も基にしつつ、内容や進め方を今後ご相談させていただきたいと考えている。
→北海道大学大学院農学研究院 愛甲 教授
既にできている部分から作っていくことには、それによるデメリットも恐らくあり、進めながら考えていくのかとは思うが注意していただければと思う。

・層雲峡ビジターセンター／山樂舍 BEAR 佐久間 インタープリター／代表
専門家の選定について、大雪山の登山道にいろいろな路線があって、整備されていく中であまり統一感を感じなかったり、補修はされたがデザインの面でどうなのかと思った例もあり、個人的にはランドスケープデザインや造園の分野の方も含めてほしい。
→事務局 友野
補修技術や植物といった様々な専門分野がある中で、全体のグランドデザインをもって公園管理の方針を定めていくことは基本でもあり、大雪山では愛甲先生がご専門の分野だが、このことの必要について認識したうえで進めていきたい。
→合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎 代表社員
大雪山では、外部の方は必要ではないほど専門家がそろっていると思いつつも、これからの国立公園の管理のあり方としては必要になってくると思っていた。それは、動植物や施工といった個々の分野の専門家ではなく、全体を通して必要な分野、どの専門家に意見を聞くべきかといったことを判断・指示できる方が必要で、ジオパークや世界遺産の認定のための評価がそれに近く、国立公園の管理もそうなるべきではないかと思う。佐久間代表のおっしゃるランドスケープには、登山道ビジョンや全体計画に近い面も入っていると思うので、こういった考えも必要だと思う。
→Asahidake Trail Keeper 藤 代表
どの専門家に意見を聞くべきか、細かい部分で知りたくなることがある。例えば数年前に赤岳で植生を根ごと切ってしまった施工例があったが、造園業では植物の根を切って植栽するのは割と当たり前だ

ったりするので、国立公園の管理としてそれが植物にとって良いことか悪いことかといった、細かい部分で意見をもらえる専門家がいるとよいと思った。

2） 山岳トイレ等に関する検討課題の整理

●事務局 菅野より資料２の説明

・北海道大学大学院農学研究院 愛甲 教授

昨年度まで山岳トイレ等検討作業部会で検討してきたことをこの登山道維持管理部会で確認することになった。トイレに関する課題の抽出が終わっただけで、対策が全て完了したということではないため、進捗確認は着実に続けていただきたい。

資料２別紙「大雪山国立公園山岳地域における山岳トイレ等設置状況」の中で、黒岳石室トイレについて加筆されており、バイオトイレの処理能力の件や荷降ろしの状況、また今年は便槽のヒーターを稼働させるといったことも書かれているが、そのあたりの状況について可能なら説明をいただきたい。

→北海道上川総合振興局 中島 主査（山岳環境）

黒岳石室の常設のバイオトイレについて、利用者数が多すぎたこともあるが、もう少し気温が高ければバイオが機能するのではと思われるため、ヒーター稼働を復活させる計画。上川地区登山道等維持管理連絡協議会からご支援を受けて太陽光パネルを取り付け、それで電源を確保してヒーターを動かすことを考えている。また、今年は北海道の予算がつき、3 年越しで荷降ろしができることになった。実施予定日は６月 23 日で現在動いている。

・山のトイレを考える会 仲俣 事務局長

資料２の「大雪山国立公園　山岳トイレ等利用環境改善・普及啓発に係る効果検証及び進捗管理」内の、12 番「登山者の携帯トイレ持参率」の「国有林及び道有林入林簿からの推計」は昨年度が 53.1%となっており、最終目標値は 100%と書いてあるが、53.1%は入林届で取ったデータの平均値ということもあり、すごく低い印象を受ける。前回の第８回山岳トイレ等検討作業部会では登山口ごとの持参率が一覧表になっていたが、野営指定地がある場所や長距離の登山ではもう 90%前後の持参率で、もう目標とすべき持参率は達成していると個人的には思っている。日帰りでは大体 60～70%かと思う。一覧表を見て、持参率を上げなければならない登山口に対して何年かかけて集中的に対策を練って持参率を上げるというようなやり方が良いと思うが、53.1%から 100%まで上げるといっても何をするのかが疑問になり質問した。

→事務局 菅野

備考欄にも記載のあるとおり、利用者数が飛びぬけて多く、その中でも持参率の低く観光利用の方が多い黒岳と旭岳の数値が平均値にも強く反映されている。実態として、本来携帯トイレを持っていただきたい層にはこの数値以上に浸透しているとこちらも認識しており、数値の出し方は工夫していきたい。

今後の目標についても、100%はある意味理想値であり、実際にはかなり浸透してきている状況でどのような目標値が適当かは改めて検討する。持参率が低い場所など、個別に対策が必要な場所があれば検討するといった方法を考えたい。

→合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎 代表社員

毎回発言している通り、携帯トイレは管理の中の一手段であって、メインの手段であるべきではない。山に登る人は全員携帯トイレで済ませろというのではなく、トイレが正しく設置されているからきちんと使って下さいというのが正しい観光地だと考えている。これだけ携帯トイレが普及し、またし尿

の運搬手段としてドローンやスノーモビルといった方法も出てきた中で、トイレをどう正しく維持管理していくかの検討を始める時期に来ているのではないかと思う。また、し尿痕の数を1つの指標にしているが、その多い少ないではなくてそこに至る踏圧が多いか少ないかが本来の問題だったはずで、携帯トイレ普及のために目的が少しずつずれていっている。私自身も高原温泉沼めぐり登山コースに携帯トイレブースを設置し、その普及啓発を行ってきたが、ここまで来たなら次はもうトイレに移るべきと思うので、その議論や検討を皆でできるようにしていきたい。
→事務局 菅野
　携帯トイレだけでなく山岳トイレ全体の改善が必要だと認識しており、既存の施設の改善も含めて、もう少しスピード感があるとよいが各主体での取り組みを進めていければと思う。指標のし尿痕数についても、本来はその周辺の植生保護のための取り組みだったことはご指摘の通りで、一方で植生調査を行うとなると労力や継続性の課題があり、簡単に調査できる尿痕数は指標として全く意味がないものではないとは思っているが、最終的な目標についてはおっしゃるとおりと思う。

・層雲峡ビジターセンター／山樂舎 BEAR 佐久間 インタープリター／代表
　資料２に「黒岳石室において、携帯トイレの使用促進を目的としたキャンペーンを継続実施」とあることについて、前回の山岳トイレ等検討作業部会でお話ししたとおり、昨年の山の日に行われた携帯トイレのキャンペーンの後、携帯トイレが層雲峡ビジターセンターの回収ボックスに入りきらず、ゴミの日の関係で3日間館内で保管したため臭いがすごかった。今年も同じような事態になるのではという懸念がある。
　また、携帯トイレにし尿を入れて回収ボックスに入れた時点で、トイレ問題を解決したような気になられては困る。し尿を常設トイレで回収しきれないという問題があるための一時的な解決策が携帯トイレだと考えており、その一時的なものを恒久化してはならないと思う。携帯トイレは石油製品であり、使用することで山の上はきれいになるかもしれないが、それを廃棄することを考えると全体としては全然エコロジカルではないということをもっと理解してほしい。例えば個室の前にそういった内容を書いた解説を設置するなど、全体まで考えたトイレの対策を検討していただきたい。
→合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎 代表社員
　携帯トイレの処理について、処理場によっては焼却できないところもあるはずなので、仮に埋め立てだとするとどうなのかなと思っていた。そういったことはきちんと明るみにしていただきたい。

・山のトイレを考える会 仲俣 事務局長
　携帯トイレ普及宣言に基づいて取り組んできたことは基本的には良かったと思っている。20年ほど取り組んで、トイレがなく非常に汚かった美瑛富士やトムラウシ南沼をきれいにしたことは非常に良かった。しかし、岡崎代表の言うように、トイレが本来目標にするところであって、携帯トイレはあくまで補助的な手段と思っている。携帯トイレの持参率や認識率も高まっており、大雪山をきれいにすることができたのだと思うが、今後は汲み取り式のトイレについて皆さんといろいろと検討して、大雪山として恥ずかしくないトイレがある状態を目指すことが目標だと思っている。

・上川南部森林管理署 岩館 総括事務管理官
　昨年度の携帯トイレ持参率53.1%という数字について、他の森林管理署や道有林のものも含め入林簿に全ての方が正しく携帯トイレの有無を書いているとは言えず、実態を反映しているとは思えないので、この数字が独り歩きすることには少し懸念がある。

3） 登山道維持管理作業計画・報告について

●事務局 村田より資料３の説明

→合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎 代表社員

できるかぎり情報共有したいが、当社の作業はほとんどが発注者のある受注業務であり、契約前に計画を出すわけにはいかなかったり、報告書を当社から提出するのも少し筋が違うかと思う。最近は本当に独自のもの以外提出していないが、実施したけれど情報が出ておらずもったいないと思うものが多々ある。事前に業務のどの段階でどこへ伝えればよいかが分かるだけでも言いやすくなるし、そういうことはあまり気にせず情報は出してもよければそうしたいとも思うが、どうするのがよいか。

→事務局 村田

作業計画案件はおよそ網羅できているかと思っていたが、そういった状況があるようであれば、予定の段階でもお知らせいただければ事務局から管理者に確認するのも一つの方法かと思う。確認して難しいようであれば仕方ないが、おそらく忙しさなどが理由の場合が多いと思うので、なんとか調整して掲載できるようにしたいと考えている。報告書についても同様で、掲載用の報告書をわざわざ作っていただく必要もなく、一部ページの削除などの対応も可能と思うため、それも含めなるべく手間がかからない方向で調整していきたい。基本的には部会前に情報を集めて、部会の場で共有できるのが一番よいと思っているので、ご協力をお願いしたい。

(2) 報告事項

●事務局 友野より資料４の説明

●事務局 上村より資料５の説明

●山のトイレを考える会 仲俣 事務局長より資料６の説明

・北海道大学大学院農学研究院 愛甲 教授

資料４について、最初のほうでもヒグマ情報について意見交換が行われていたが、寄せられた情報の根拠や確からしさの確認、情報の評価をどのように行うのか、毎日１名配置される対応員がどういう方なのかにもよると思うが、そのあたりが大変苦労されるのではないかと思うのでもう少し詳しく伺いたい。

また資料５について、登山者数のデータは以前は佐藤文彦さんが名簿などを収集し整理されて、毎年のいろいろな会議のたびに共有していただいていた、非常に重要なデータ。説明のあったとおり、さまざまな傾向がここから読み取れるため、毎年このような形で整理いただけるとよいと思う。知床ではこういったデータのオープン化の動きもあり、山だけでなくビジターセンターなどの施設の利用状況も含めて整理しておくべきと思う。

→事務局 友野

ヒグマ情報については情報の評価や判断が大きな課題と考えている。登山者が利用するための情報としては、事実に基づいて取ってほしい行動を示すための情報の評価や判断が必ずどこかで必要となる。一方で、朝陽山の件でもそうだったが、情報発信者へ直接確認を取ることが毎回可能とも限らないため、ある程度のところで事実と判断して動くことになる。根拠を固めることとスピードとのせめぎ合いの中で進めていくことになると思っている。対応員にはヒグマに関する知識や経験、情報収集と発信のやり取りを行うコミュニケーションがある程度できる方でないと務まらないと思われるが、そこも含めて受注者とよく相談しながら進めていく必要がある。対応員が歩道の閉鎖といった全てのことまで判断するわけではなく、各管理者が判断すべきところとの切り分けなど、都度試されながら進めることにな

ると予想している。
→北海道大学大学院農学研究院 愛甲 教授
　非常に重要な課題と思う。すべての情報を明確にできるわけではなく、中には疑わしいものもあり、朝陽山の件では現場の確認を行ったのかという点も少し気になった。そのうえで、羅臼岳では情報の収集と対応についてフローを整理しているが、集まってきた情報に対してどういうアクションを起こすか、情報が不確定の中でもできるだけ早めにアクションを起こさなければならない場合もある。あってはならないことだが、事故などが起きた後に、どういう情報が集まっていてどう対応したのかが問われることにもなりかねないので、フローをきちんと整理しておくことが重要だと思う。
→合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎 代表社員
　朝陽山の情報収集と発信は、初動としては良かったと思う。大雪山のヒグマ情報はほとんど関係者が現地確認をしていない情報であり、現地確認して理解してからの発信では遅すぎるということが多い中で、まずは性善説で写真や情報の件数から判断して発信するしかないと思っている。そういった可能性の時点で情報発信したことは良かったのではと思うし、もしヒグマがシカの死体を自分の所有物だとして威嚇してくるのであれば危険度は一番高い状態なので、その可能性を有しているのなら登山者への情報提供は当然だったと思う。一方で、ヒグマ情報センターで登山者からの情報を聞く中でも、ただガサガサと音がしただけで大きなヒグマがいたという人もいてすべてを信用するわけにはいかず、情報の判断は関係者でしていくべきだと思う。また、特に去年から今年にかけて、街のヒグマと山のヒグマを同じように認識されている方が増えていると肌で感じる。同じ動画でも、人間が居るところにヒグマが居ることを良しとするのかといった意見も多々来ており、我々関係者が街のあり方と山のあり方の違いについてしっかり発信していかないと、国立公園の利用はままならないものになりかねない。つまり、街はヒグマが暮らす場所ではないので入ってきたら駆除するのは仕方がないが、山は山で、ヒグマが居るところに人が入るのであればルールを今まで以上に認知してもらわなければならず、その価値観を作り上げていく情報発信を関係者が一丸となって行っていくべきだと思っている。ヒグマ情報センターでも情報発信をしていくので、発信した情報に対しての意見があれば積極的にお答えしていきたいのでお寄せいただきたい。

・Asahidake Trail Keeper 藤 代表
　資料４にある貼り紙や現地掲示に関連して、機関ごとにいろいろな掲示物を作っていて見づらいと感じる。一般登山者に向けて掲示することを考えたものであれば、分かりやすくなるようもっとよいデザインで統一感のあるものができないかと思う。
→事務局 友野
　資料４にある現地掲示例の写真のものは２年前に環境省業務したもので、利用者の目をなるべく引きながら情報の要点をまとめて伝えやすいように配慮して受注者に作成いただいたフォーマット。このフォーマットに統一されていくのかどうかは今後の運用や結果次第だが、全体として目を引きやすく伝えやすい掲示になっていけばよいと思う。フォーマットに関しても随時ご意見をいただけるとありがたい。

3. その他

・層雲峡ビジターセンター／山樂舍 BEAR 佐久間 インタープリター／代表
　赤岳登山バスが今期運行されないという情報を昨日把握した。この件は登山道にも関係があり、例えば本州から来て公共交通機関に頼る方も一定数居るので、基本的な情報として早めに情報発信すべきだと思うが、昨日確認した時点では道北バスのホームページには掲載されておらず、今後は廃止、あるい

は紅葉シーズンに関しては運行されるかもしれないという話もあり、未決定の様子。道北バスは協議会の構成員になっていたと思うが、協議会として一般向けに早く情報発信できる体制を整えていただきたい。

→事務局 友野

道北バスは部会ではなく上位の協議会の構成員だが、当協議会に向けても情報提供はなかった。事業者のホームページにも情報が挙がっていない状況なので、協議会内の情報のやり取りというより事業者内でのことという段階かとは思うが、特に具体的な案はないものの登山情報のやり取りなどに協議会を活用していただけるような形は目指していきたい。

→NPO 法人かむい 濱田 代表理事

この件は噂として１か月ほど前から聞いていたが、３日ほど前に確定したことを上川町役場の方と確認した。道北バスから正式な発表があった後に情報発信する予定。紅葉期のシャトルバスに関しても未定とのこと。

4. 閉会

以上